

「ひきこもり」における透明な排除のプロセス

村 澤 和多里

要 旨

近年「ひきこもり」の多様性が指摘され、厚生労働省(2010)による「ガイドライン」ではさまざまな角度から状態を判断する「多軸評価」が提案されている。しかし、これまでも指摘されてきたように、ひきこもり状態に陥るまでの経歴に目を向けると多くの共通性が認められるという側面もある。本研究では若者自立支援施設を利用している「ひきこもり」経験者を対象に面接調査を行い、多様な背景をもつはずの彼らが類似した体験を経た挙句、「ひきこもり」という状態に陥っていくプロセスについて検討した。その結果、「いじめられ体験」「不登校」「就労の失敗」などがキャリア形成を阻害していることに加え、表面上はキャリア形成に影響がないように見える「透明な排除」のプロセスが浮かび上がった。

キーワード：ひきこもり いじめ 不登校 透明な排除

1. 本研究の課題

「ひきこもり」が社会的問題として認識されてから久しい。「ひきこもり」の若者の存在は1990年代から問題にされはじめたが、斎藤環の著作の出版(斎藤, 1998)、2000年におきた「西鉄バスジャック事件」などがきっかけとなり、急激に世間一般から注目を浴びようになっていった(高山, 2008)。その後、公的な支援枠組みが模索されてきてはいるものの、今なお問題は収拾しているとはいえ、むしろ問題が先送りされたままとなっている。こうした中で、近年では、ひきこもり状態の長期化や高齢化が新たな問題として浮上してきている。

(1) 「ひきこもり」の多様性

今や「ひきこもり」という言葉は日常生活に浸透しているが、この言葉の意味する状態像は多様である。近藤・岩崎・小林・宮沢(2007)は「ひきこもり」について多様な見解が入り乱れていることを指摘し、精神医学的背景と治療・援助方針にもとづいて3群に分けることを試みている。第1群は「統合失調症、気分障害、不安障害などを主診断とし、薬物療法などの生物学的治

療が不可欠ないしはその有効性が期待されるもの」、第2群は「広汎性発達障害や精神遅滞などの発達障害を主診断とし、発達特性に応じた心理療法的アプローチや生活・就労支援が中心となるもの」、第3群は「パーソナリティ障害（傾向traitを含む）や同一性（アイデンティティ）の問題、身体表現性障害などを主診断とし、パーソナリティ特性や神経症的傾向に対する心理療法的アプローチや生活・就労支援が中心となるもの」である。また、この分類を踏まえた上で、厚生労働省（2010）においては「様々な要因の結果として社会参加（義務教育を含む就学、非常勤を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらないで外出をしてもよい）を指す現象概念」という認識が示され、背景として精神障害や発達障害の有無やパーソナリティの傾向などを多角的に判断する「多軸評価」が提案されている。

（2）ひきこもり状態に至った若者たちに共通した体験

しかし「ひきこもり」という概念が含む多様性が指摘されている一方で、ひきこもり状態にある若者たちに見られる共通した体験として、不登校やいじめられ体験などの否定的な学校体験（武藤，2001）などが指摘されてきた。

・いじめられ体験

東京都（2008）による調査では、「ひきこもり合計群」において「生育環境・学校での経験」という調査項目で「友達にいじめられた（いじめられている）」と答えた者の割合は43.8%（一般群18.0%）であった。内閣府（2010）の調査においても、「ひきこもり群」においては「友達にいじめられた」ことがあると解答した者の割合は42.4%（一般群22.9%）であった。

これらの調査結果から、ひきこもり状態にある若者たちの40%以上が過去にいじめられ体験を有していると考えることができる。ここからいじめられ体験が直接的にひきこもりの原因となっていると結論することはできないが、大きな影響を及ぼしていることが予想される。

・不登校

厚生労働省（2003）の調査においては、ひきこもり状態にある若者の61.4%が過去に不登校を経験していることが確認されている。東京都（2008）によると「ひきこもり合計群」において「不登校を経験した（している）」と答えた者の割合は34.4%（一般群5.3%）であり、また、内閣府（2010）による調査ではひきこもり群の若者において「不登校を経験した」と答えた者の割合は23.7%（一般群5.4%）であった。

このように、いじめられ体験と比較すると、不登校を経験した者の割合にはばらつきがあり、近年の調査ではひきこもり状態との関連性はそれほど高くはないように思われる。しかし、一般群における不登校経験者の割合が5%程度であることと比較すると、ひきこもり状態にある若者における不登校経験者の割合は明らかに高く、不登校経験が後のひきこもり状態に少なからず影響を及ぼしていることがうかがわれる。

・就労の失敗

厚生労働省（2003）による調査では、ひきこもり状態に至った原因として「職場不適応」と答えている者の割合は28.1%であり、「就職活動不調」と答えている者は12.5%であった。内閣府（2010）による調査では、ひきこもり状態に陥ったきっかけとして「職場になじめなかった」と答えている者は23.7%、「就職活動がうまくいかなかった」と答えている者は20.3%であった。

就労や就職活動での失敗体験は、「いじめられ体験」や「不登校」に比べてより直接的な原因として回答されている。しかし、いずれの調査においても、就労や就職活動の失敗について答えている者の中には、過去にいじめられ体験や不登校経験を有する者も含まれており、それらの体験がひきこもり状態に何らかの影響を及ぼしている例も少なくないと考えられる。

（3）進行するプロセスとしての「ひきこもり」

このように、ひきこもり状態に至る要因の多様性が指摘される一方で、そのような状態に陥った若者たちには多くの共通した経歴が認められることが指摘されてきた。もちろん、彼らの経歴に共通点が認められるとしてもそれを直接的に「ひきこもり」に至った原因とみなすことはできない。また、前項で述べたように就労や就職活動での失敗の背景として「いじめられ体験」が影響していることも考えられるなど、それぞれの要因が相互に影響し合っていることが考えられる。

すでに斎藤（1998）は、ひきこもりをシステムティックな悪循環の構造のなかに取り込まれて脱け出せなくなるようなプロセスとして捉え「ひきこもりシステム」という概念を提示している。また、このようなプロセスは社会経済生産性本部（2007）のひきこもり経験者を多数含む元「ニート」の若者を対象にした調査報告においても指摘されている。「人間関係が苦手」「手先が不器用」「計算や字を書くことが苦手」などの事情が職場の人間関係のトラブルといったネガティブな体験につながり、苦手意識がさらに増幅されて就労が困難な状態に追い込まれて行く様子がうかがわれる」というのである。

しかしながら、前節で述べたような「いじめられ体験」「不登校経験」「就労の失敗」などがどのように影響しあいながら「ひきこもり」というプロセスを進行させていくのかについては、具体的に検討した研究は少ない。本研究では、「ひきこもり」という現象を、背景となる多様な要因が時間とともに絡み合いながら進行していくプロセスと考え、このプロセスを具体的に把握するために、若者自立支援施設を利用している「ひきこもり」経験者を対象にした面接調査を行い、その結果について検討する。

2. 調査の概要

（1）フィールドと調査対象者

本研究では、筆者が臨床心理士として関わりを持ってきたX県の若者自立支援施設（以下、支

援施設)において、利用開始時にひきこもり状態にあった若者18名を調査対象者(以下、「対象者」)とした。ただし、調査は対象者の施設利用形態が安定してから開始した。なお、本研究では「ひきこもり」について厚生労働省(2003)のガイドラインに従って定義し、そのような状態にあることを「ひきこもり状態」と表現することにするが、これらは必ずしも自宅に閉居した状態を意味していない。

支援施設利用開始時の対象者のプロフィールを表1に示す。年齢は20代から30代にわたり、性別は男性15名で女性3名である。この偏りは、そもそもひきこもりの若者に男性が多いことと関係していると考えられる。

(2) 調査期間

調査は2009年8月から2012年8月にかけて行った。

表1 支援施設利用開始時の対象者のプロフィール

対象者	性別	年代	支援施設利用開始時の状態
Aさん	男性	20代	ほとんど自宅からでない
Bさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Cさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Dさん	男性	30代	自らの意思でひきこもり状態から脱したばかり
Eさん	男性	20代	ほとんど自宅からでない
Fさん	男性	20代	たまに自家用車で外出する以外は自宅から出ない
Gさん	男性	20代	しばしば自宅から出られなくなる
Hさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Iさん	女性	20代	しばしば自宅から出られなくなる
Jさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Kさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Lさん	男性	20代	生活上の必要が無い限り自宅から出ない
Mさん	男性	20代	しばしば自宅から出られなくなる
Nさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Oさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Pさん	男性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Qさん	女性	20代	外出はできるが、他者との接触は無い
Rさん	女性	30代	外出はできるが、就職活動までは至らない

（3）調査方法

調査は支援施設内の個別面談室においてインタビュー形式で行い、承諾を得られた場合にはICレコーダーに音声を録音した。なお、調査に要した時間は1時間から1時間半程度であった。

（4）調査内容

支援施設を利用するようになるまでの経緯、小学校や中学校での様子、中学校卒業後の進路、ひきこもっていた時の様子などを中心に、対象者本人がひきこもり状態に至るまでの生活経験を自由に語ってもらった。

（5）倫理的配慮

調査時に、①本研究の目的について、②匿名性と守秘義務の約束、③研究についての問い合わせ先の明示、を行い承諾を得た。

3. 結果

（1）「ひきこもり」状態に至るまでの経歴

対象者の学校および就労における体験と家庭状況を表2に、対象者の学校および就労における経歴をまとめたものを図1に示す。

対象者18名中10名が中学校でのいじめられ体験について語っているが、その内容のほとんどは嫌がらせや無視といったもので、主観的な程度は様々であった。また10名中6名がいじめられたことが原因の一つとなり不登校状態に至っていた。一方で、他の4名はいじめられ体験をきっかけに学校規範への適応を強化し、大学や専門学校に進学していた。

中学校において不登校を経験した対象者は18名中10名で、そのうち小学校における不登校経験を有する者は1名であった。これらの対象者10名のうち中学校卒業後の進路は、普通高校を卒業している者が2名で、4名は通信制高校や高等学校卒業程度資格認定試験受験サポート校（以下、サポート校）へ進学しており（うち2名が中退）、1名が普通高校を中退したのち高等学校卒業程度資格試験（以下、高認試験）を受験して合格している。他の3名は不登校に引きつづいて長期にわたるひきこもり状態に至っていた。

ひきこもり状態に至る直前に就職活動でのつまずき体験をしている対象者は18名中7名で、そのうち4名にいじめられ体験が、2名に不登校経験が認められた（1名は両方を経験している）。これらの体験がない対象者は2名で、彼らには大学卒業までの学歴において大きな不適応はなかった。

その他、対象者18名中5名がアルバイトでの挫折体験を語っているが、すべていじめられ体験者であった。

就労において何度も解雇された体験を有する対象者は18名中3名おり、そのうち2名は短大や専門学校を卒業したものの、正職員としては雇用されずに解雇された後に、短期の雇用を転々とした後にひきこもり状態に至っていた。

また、家庭状況として小学校時代から父親または母親のみの一人親家庭で生育した対象者は18名中5名であった。

これら対象者の経験を「いじめられ体験」、「不登校」、「就労・就職活動の状況」、「学歴」を基準に群分けすると以下ようになる。

表2 対象者の学校および就労における体験と家庭状況

群	事例	性別	年代	いじめられ体験	長期のひきこもり	小学校不登校	中学校不登校	サポート校等※	高校卒業	高校中退	大検・高認資格	大学・専門学校等卒業	大学・専門学校等中退	就職活動での躓き	重なる挫折	一人親家庭	
①	i	A	男	20代	+	+										+	
		B	男	20代	+	+									+		+
		C	男	20代	+	+									+		
		D	男	30代	+	+			+						+	+	
		E	男	20代	+	+			+		+				+		+
	ii	F	男	20代	+	+				+			+		+		
		G	男	20代	+	+				+			+		+		
	iii	H	男	20代	+					+			+		+		
		I	女	20代	+					+			+		+		
J		男	20代	+					+			+		+			
②	i	L	男	20代		+	+	+			+					+	
		M	男	20代		+	+	+		+						+	
		N	男	20代		+	+			+	+	+		+			
③	i	O	男	20代					+			+		+			
		P	男	20代					+			+		+			
	ii	Q	女	20代					+			+			+		
		R	女	30代					+			+			+		

※高等学校卒業程度認定試験受験サポート校および通信制高校など

① いじめられ体験が影響していると考えられる群

i いじめられ体験から不登校、長期のひきこもりに至った群

- (Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん)
- ii いじめられ体験から不登校に陥り、一時回復したものの再びひきこもりに陥った群
(Fさん、Gさん)
- iii いじめられたが不登校にならず進学し、就職活動で挫折しひきこもった群
(Hさん、Iさん、Jさん、Kさん)
- ② いじめ以外の要因で不登校に陥ったことが影響していると考えられる群
(Lさん、Mさん、Nさん)
- ③ 大学・専門学校までは適応していたが、就職活動・就労体験でつまづいた群
 - i 大学・専門学校までは適応していたが、就職活動でつまづいた群
(Oさん、Pさん)
 - ii 解雇され転職を繰り返し、ひきこもりに至った群
(Qさん、Rさん)

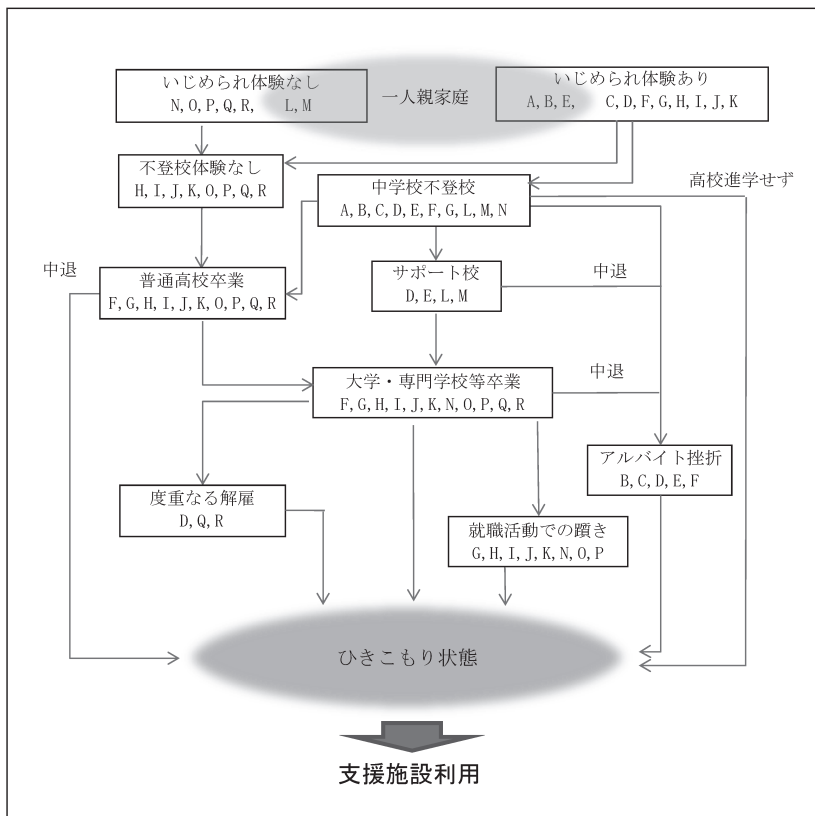


図1 対象者の学校および就労における経歴

(2) 各群の特徴

次に各群の特徴と代表的な事例を示す。なお匿名性を守るため、事例には変更を加えてある。

① いじめられ体験が影響していると考えられる群

本研究の対象者においては18名中10名がいじめられ体験について語っている。語られる体験は、酷い暴力や中傷を受けてたものから、無視される体験が中心のものまで様々であり一括することは難しい。Aさん、Bさん、Fさんは暴力を交えたいじめの被害について、DさんとEさんは言葉によるいじめの被害について語っている。またHさん、Iさん、Jさんは中学校時代に仲間はずれにされていたと語り、Lさんは「グループ分けていつも孤立していたし、物がなくなることがたびたびあった」などという体験を「いじめ」という文脈で語っている。

また、いじめや無視される目にあったという事実に加え、周りの人が理解してくれなかったということが傷を深めたと語られることも多い。Iさんは、中学校時代に教室で無視や意地悪をされたが、それ以上にショックだったのが小学校からの幼馴染が誰も守ってくれなかったことであったという。またEさんは、中学の部活で他の部員から口を聞いてもらえないなど仲間はずれにされ、担任にそのことを訴えたが、かえって孤立状況が深まってしまった。後者の場合は直接的な誹謗や中傷より「無視される」ということが苦痛の中心であったといえる。

周囲に彼らを排除する意図があったのかどうかは判断しがたい場合もあるが、これらの孤立化されていく体験は、彼らの自己像と他者への信頼を著しく傷つけ、不登校状態さらには長期間のひきこもり状態へと追いこまれていく。

i いじめられ体験から不登校、長期のひきこもりに至った群

この群の対象者は、中学校時代のいじめられ体験が原因の一つとなって不登校に陥り、そこから抜け出すことができず長期のひきこもりに至ったと語っている。いじめられ体験の内容としてAさんとCさんは、身体的暴力や暴言など直接的に傷つけられた体験を語っている。ただし、中学校卒業後の進路については、Aさん、Bさん、Cさんは進学せずにまったくのひきこもりに陥ったのに対して、Dさん、Eさんは通信制高校に進学している。しかし、通信制高校で学業への動機づけを保つことは難しかったようで、Dさんは5年かけて卒業しているが、Eさんは中退している。

この群の対象者に共通しているのは、強い劣等感と対人恐怖傾向であり、中学校での不登校時には実質的に自宅から出られない時期があったことである。

事例Aさん (20代 男性)

中学2年の時に、体が小さいことを理由にいじめられて、不登校状態になる。その後、児童相談所に相談に行くがなじめず、長期(10年以上)のひきこもり状態に陥る。その間、ほとんど自宅から出ずに、テレビを見たりゲームをしたりして過ごしていた。父親とは幼少時に離婚により

離別している。母親は病気がちで、Aさんのことで相談機関を訪れる余裕がなかった。また、母親自身、Aさんが身近にいてくれた方が生活しやすかったこともあり、積極的に変化を望んでいなかったと思われる。変化が起こったのは、母親が病気で入院した時に、買い物や見舞のために外出せざるを得なくなった時である。母親の通院する病院関係者から相談機関を紹介され、相談を受けることになった。

事例Dさん（30代 男性）

中学校2年生の時にいつも一緒にいる同級生たちから言葉でいじめられ、そのことを担任に相談するが取り合ってもらえなかった。いじめが長期化するなかで、中学校3年生の夏から不登校状態になった。通信制高校に進学し5年かけて卒業するが、その間は対人恐怖が強く「半分ひきこもり」のような状態で、対人関係はほとんどなかったという。父親の勤める会社の経営不振で家計が苦しくなったことに危機感を感じ、一度は就職を試み、工場で軽作業のアルバイトに従事するが人間関係になじめず退職。その後も断続的にアルバイトとして働くが「相手の顔を見て話すのが苦手」であることを注意されるなどしていずれも短期の雇用で終わる。25才を過ぎるころからは長期のひきこもりに陥った。

ii いじめられ体験から不登校に陥り、一時回復したものの再びひきこもりに陥った群

この群の対象者（Fさん、Gさん）は、中学校時代のいじめられ体験が原因の一つとなって不登校に陥ったが、高校ではそこから回復し、大学や専門学校に進学している。しかし、高校から大学や専門学校での生活では友人ができず孤立していた。結局、就職活動を目前にして立ちすくんでしまい、進路未定のまま卒業し、行き場を失って徐々にひきこもりに陥っていった。

この群の対象者に共通しているのは、強迫性と対人的孤立傾向である。

事例Fさん（20代 男性）

中学校の時にクラスメートからわざと体当たりをされるなどのいじめを受けて、1ヶ月ほど不登校状態に陥った。その時に担任の教師や両親から学校に行けない理由を問いただされたが、自分でもはっきりと理由がわからず、ただただ情けない気持ちになり、精神的に追いつめられていった。結局、中学生の間は断続的に不登校状態が続いたが、高校では一転してほとんど休まずに登校した。卒業後は、担任教員の勧めもあり近くにある大学に進学した。しかし学業を続ける意欲がわかず、中退。以後5年間、一度はアルバイトを試みたものの仲間から嫌がらせされているように感じて2日ほどでやめた。その後、ほとんどひきこもり状態で過ごし、やりきれない気持ちになり、飲酒の末に暴れることもあったという。

iii いじめられたが不登校にならず進学し、就職活動で挫折しひきこもった群

このグループの対象者（Hさん、Iさん、Jさん、Kさん）は、中学校時代にいじめられ体験を有するが、そこから不登校に陥ることはなく、高校、さらに大学や専門学校へと進学している。しかし、高校から大学や専門学校での生活では友人ができず孤立していた。結局、就職活動を目前にして立ちすくんでしまい、進路未定のまま卒業し、行き場を失って徐々にひきこもりに陥っていった。

この群の対象者に共通しているのは、必要があれば外出はできること、強迫性と対人的孤立傾向である。

事例Hさん（20代 男性）

Hさんは、20代前半の男性で、中学生のときに陰口をささやかれていると感じ、以後周囲から「バカにされているのではないかと」気にするようになったというが、不登校には陥らなかった。その後、「バカにされないように」と勉強して優秀な成績を修めるように努力していたが、次第にそのことがプレッシャーになり、試験が近づくとも過呼吸や動悸などのパニック発作のような症状に襲われるようになった。友人はできず、学校生活は苦痛であったというが、それでもあまり休むことなく高校を卒業した。

大学へは推薦入学。友人はできないままであったが、無事に4年間で卒業した。就職活動は大企業を中心に行うが、結局内定はもらえなかった。Hさん自身も、職場の人間関係に適応できるか漠然とした不安を抱いており、「就職が決まったらどうしよう」という不安があったのだという。卒業が近づくにつれて将来についての不安が強くなり、卒業から半年すぎたころ、就労についての相談を目的に支援施設に来所した。

事例Iさん（20代 女性）

中学校の時に、部活で無視を中心にしたいじめにあう。いじめの中心メンバーの一人は小学校の親友だった。しばらくして部活はやめたが、それでもクラス内でいじめが続いた。いじめに耐え切れず、担任に相談するがあまり効果的な対応はなされなかったという。

高校ではいじめをうけず、何とか行くことはできたが、友人関係を作ることが恐くなってしまい、孤立していた。その後、大都市圏の短大に進学して一人暮らしをしたが、ほとんど友人との交流はなかった。学業はそれなりに修めたが「むなしい」という。短大卒業後、就職も考えたが対人関係をうまくやれるか不安になり断念。実家に帰りほとんど外出しないでいるうちに、徐々に対人恐怖的になっていき、ひきこもりに陥ったという。

② いじめ以外の要因で不登校に陥ったことが影響していると考えられる群

この群の対象者（Lさん、Mさん、Nさん）は、中学校時代に学業での困難や漠然とした孤立感から徐々に不登校に陥ったが、その後そこから回復しサポート校へ進学、LさんとMさんは卒業し、Nさんは通信制高校を中退したものの自力で高校卒業認定試験に合格している。その後MさんとNさんは大学に進学したものの、就職活動を目前にして立ちすくんでしまい、進路未定のまま卒業し、行き場を失って徐々にひきこもりに陥っていった。

この群の対象者に共通しているのは、非常に社会的で他者に気を使う側面と、心配性で強迫的な側面があることである。

事例Nさん（20代 男性）

高校1年生の時に、体育の授業が苦痛であるとの理由で不登校になり始め、2年生で中退。しばらくひきこもり状態を送っていたが、大検の制度が変わったのをきっかけに受験し合格。しかし、その後も進路を決められず行き場を失った状態になっていたが、見かねた母親のすすめで支援施設を訪問し、活動に加わる。同じような状況の若者とともに農作業などを体験していくなかで徐々に気持ちがほぐれ、大学に進学。学部卒業後に就職することへの不安があることもあり大学院へ進学するが、修了が近づくとも再び就職することへの不安が強くなり、十分に就職活動をできないまま修了し、その後徐々にひきこもりに陥っていった。

③ 大学・専門学校までは適応していたが、就職活動・就労体験でつまづいた群

i 大学・専門学校までは適応していたが、就職活動でつまづいた群

この群の対象者（Oさん、Pさん）は、中学、高校、大学は問題なく卒業はしたものの、就職活動に踏み切ることができず、卒業後徐々に行き場を失ってひきこもっていった。彼らは、学校への在籍期間を通して友人をほとんど持たず、孤立した状態で過ごしてきた。

この群の対象者に共通しているのは、受動的で意思がはっきりしておらず、「なんとなくこのままではダメなのではないか」というように漠然とした不安を訴える点である。

事例Oさん（20代 男性）

Oさんは大学を卒業するまでは、いじめられた経験も不登校の経験もなく、学業面でも問題なく過ごしてきたという。Oさんは現在、行き場がなく家にひきこもりがちになっている状態について、「これまで〈消去法〉で進路を選択してきたが、気がついたら選択肢がなくなっていた」と述べている。彼は、自分の学力にあった高校へ進学し、高校からの推薦で大学へ進学した。しかしその間、友人は一人もできず、ただ学校へ通って「座っていただけ」だったという。

大学生活も家との往復で、単位は順調に取得していったが、何のために大学に通っているのかわからず、生き生きしている大学生に比べて「自分は劣った存在だ」と感じるようになったとい

う。そして大学で就職活動の時期が近づき、就職指導で面接を受けるようになってから、面接をこなすことができるのか、また就職後対人関係でうまくやっていけるのか不安になり、結局は就職活動をできないまま卒業した。大学は何か卒業したものの「むなしさ」だけが募ったという。大学卒業後、就職も考えたが対人関係をうまくやれるか不安になり踏み切れないでいた。大学を卒業してからも始めのうちは、それなりに外出していたが、次第に行く当てがないことと、仕事をしていないことに対する近所の眼が気になることなどから、家にひきこもりがちになっていったという。

ii 解雇され転職を繰り返し、ひきこもりに至った群

この群の対象者(Qさん、Rさん)は、専門学校や短大までは特に問題なく過ごし、卒業して就職はしたものの、しばらくして解雇され、その後転職を繰り返しながら徐々に無業状態になり孤立していき、ひきこもりに至った。

事例Qさん (20代 女性)

Qさんは専門学校を卒業し、しばらくデパートで非正規雇用の販売員として就労していた。その会社で、正社員になりたいという旨を上司に相談したところ、ほどなくして解雇されたとのことである。その後、いくつかの会社の就職面接を受けるが、本人が関心を持つ販売関係の仕事には就くことができず、しだいに「また否定されるのでは」という恐れが強くなり、就職活動を行う気力を失い、ひきこもりになったという。

ひきこもり状態に陥って1年半が過ぎてから、自分の意思で支援施設に訪れた。3ヶ月ほど支援を受けた後に、気を取り直してスーパーの調理部門のパートの仕事に就くことにした。本人自身は不本意な仕事ではあったが、とりあえず履歴書に空いた穴を埋めるために仕事をはじめたのだという。

事例Rさん (20代 女性)

Rさんは、製菓工場の非正規社員として雇用されたものの、週に数日しか勤務を言い渡されず困っていた。しかし、その会社は新人を次々に雇用していった。結局、この会社は急に大口の注文が入ったときのために常に流動的な勤務ができる人材をストックしていたのである。彼女は他にも職を探したが、やはり不安定な就労形態のものしか見つからず、自宅にいたことが多くなった。はじめはそれほど不安を感じていなかったが、次第に「平日の昼間に自宅にいるのは変だと思われるのではないか」と思うようになり、自宅にいるときにはカーテンを閉め切ったり、あるいは用もないのに外出を装ったりと過剰に人目を気にするようになっていった。そのうちに対人恐怖感が強くなり、外出する気力を失ってひきこもりに陥っていった。

（3）一人親家庭

また、本研究の調査対象者のうち5名が両親のうちいずれかの死去、離婚や別居などの理由によって、一人親家庭で生育した経験を有していた。どの対象者も両親のうちいずれかとの離別を10才より以前に体験している。

事例Bさん（20代 男性）

小学生のころ父親が他界し、その後母親と障害のある妹と3人暮らしになった。父親にかわり、母親が仕事に出るようになったため、Bさんは妹の世話をする役割になった。しかしそのことが負担になったことや、小学校高学年になってから学校でいじめを受けるようになったことが重なり、中学2年生のころには学校に行かないで家で母親や妹に暴力をふるうようになった。

その後、中学校で相談指導学級に紹介されたが、実際のところ相談指導学級にはほとんど通うことができなかった。中学卒業後は通信制高校へと進学したが、母親の手助けによって課題を仕上げて何とか卒業したというのが現実であった。

高校を卒業した後、しばらく家で過ごしていたが、2年ほどたった時に一念発起してコンビニエンスストアでアルバイトを始める。しかし、仕事をなかなか覚えられないことを注意されてやめる。その後、しばらく自宅にひきこもり状態で過ごしたのちに、母親のすすめで相談機関を訪れた。

事例Lさん（20代 男性）

Lさんは中学2年生の時に友人にからかわれたことをきっかけに不登校になり、中学卒業後は高認サポート校に進学。幼少時に病気で母親と死別し、その後父親と近所に住む母方祖父母たちによって育てられた。本人によると、安心して甘えることができる場所がなかったことがひきこもりに陥った根底にあるという。（Eさんもほぼ同様の経緯）

4. 考察

（1）ひきこもり状態に至る顕在的要因

本研究の対象者においても、これまでの調査において指摘されてきたように、ひきこもり状態に至る要因のうち大きなものとして「いじめられ体験」「不登校経験」「不安定な就労形態」が浮かび上がってきた。また、本調査においては「一人親家庭」のもつリスクについてもいくらかの示唆が得られた。本節では、これらの要因が対象者にどのような影響を及ぼしたのかを考察する。

① いじめの影響

本研究の対象者においても18名中10名がいじめられた体験があると語っており、ひきこもり状

態に至る要因としていじめられ体験が大きいことがうかがわれる。語られたいじめられ体験は、酷い暴力や中傷を受けていたものから、無視される体験が中心のものまで様々であり一括することは難しいが、いじめられた体験を持つ対象者のうち6名が不登校状態に陥っており、大きな影響を与えていることがうかがわれる。

特に中学校の時に身体的暴力や暴言等のいじめにあった対象者には、その影響が大きかったようである（Aさん、Cさん）。彼らはいじめられ体験によって、強い対人恐怖状態に陥ってしまい、そのために長い間外出不能のひきこもり状態に陥っていた。

その他の対象者の場合、いじめられ体験の内容は「無視」「仲間はずれ」「ものがなくなる」などであり、クラスメートたちに彼らを排除する意図があったかのどうか判断が難しいが、これらの孤立させられていく体験は、彼らの自尊心を深く傷つけ、同時に他者への不信任も深く刻み込まれてしまったようである。

いじめられ体験を語った対象者には、不登校には陥らなかった者や、中学校で不登校状態に陥っても高校で回復し、さらには大学、短大、専門学校などに進学した者も多い。しかし、彼らにしてみても、進学先で友人を得た経験を語る者はほとんどおらず、卒業単位の修得だけを目標に学校生活を送っていた。表面的には適応できたとしても、他者に対する不信任や恐怖心をぬぐうことができず、安定した対人関係を築くことに著しい困難が生じているようである。

また、いじめられ体験は外傷体験として被害者の心に今なお影響し続けている。「一人である」と中学のときにいじめられた時のこととかを思い出して、頭がもやもやしてくる」（Fさん）というように、いじめられ体験をもつ対象者の多くが過去の記憶にとらわれ続けている。これは心的外傷後ストレス障害（PTSD）における「侵入症状」（Harman,1992）と似ているが、その異同については慎重に検討する必要がある。というのは、そのような反復される体験のイメージについて語る人のなかには、いじめられ体験の内容は無視や仲間はずれが中心であったと述べている者もあり、反復されるイメージと矛盾するように思われる場合もあったからである。反復されるイメージは、PTSDにおける侵入的な想起とは異なり、内省的思考のなかで徐々に想起されていき、やがてははっきりとした輪郭をもつ記憶として構築されていくという性質を考えることができる。このようなプロセスについて村澤（2012）は「トラウマ化」という概念を用いて説明しており、過去に傷つけられた体験にとらわれ続けることによって、現在生きている世界との相互作用が狭められてしまっていることを問題にしている。

② 不登校経験の影響

対象者のうち10名が中学校で不登校を体験している。その期間は3か月程度（Mさん）の短期間の場合もあるが、他の9名は中学校卒業まで不登校状態が続いている。

実質的にひきこもり状態にあっても、中学校や高校に籍を置いている限りは形式上は所属があるのであるが、高校に進学しなかったり、高校を中退をしてしまうなど、もはや学校教育の範疇

ではなくなると「不登校」とは呼べなくなる。

Aさん、Bさん、Cさんのように、中学校で不登校状態に陥ったまま高校進学しなかった場合、年数を経て社会に踏み出そうという気持ちになっても、学歴や経験の不足が壁となり、最初の一步を踏み出せない状態になる。また、高校や大学に進学した対象者の多くは、対人接触を極力避けるため社会的経験が不足しがちで、自信のなさから就職活動に踏み出せない場合が多い。彼らの場合は卒業後、学校という社会参加のための踏み台を失ってしまい、孤立した状態に陥ってしまう。

Nさんの場合、中学校で不登校に陥ったのち、時間はかかったものの大検などを利用してつづ大学まで進学したが、就職活動を行う際に、履歴書の学歴欄に空白の時期があることについて否定的な印象をもたれるのではないかと懸念し、そのために就職活動に踏み込めなくなっていた。

また通信制高校やサポート校に進学した者の場合、実際にはほとんど自宅にひきこもっていた場合も多く、履歴上は順調に学歴を積み重ねているように見えても、社会経験が伴っていない。

このように実質的に孤立した状態が長く続くと、社会から取り残された感覚が強くなっていく。「しばらくの間ひきこもっていたため世の中から遅れている」（Aさん、Fさん）という感覚が典型的なものである。この感覚は長期化すればするほど重くのしかかり、特に20代後半をすぎると「もう遅い」（Dさん）、「取り返しがつかない」（Fさん）という意識が強く語られるようになり、社会的自立への可能性を自ら否定するようになっていく。しかし、その背後には「いろいろ考えたけれど（現状から抜け出すのは）無理だと思う」（Aさん）、「（自分なりの努力を）やってみたけれど逆効果」（Iさん）というような試行錯誤も見られ、その結果の結論であるともいえる。一度、学歴のルールから逸れてしまうと自力で元に戻ることは非常に困難であり、そのために社会への復帰を諦めざるをえないという面があると考えられる。

③ 就労や就職活動の失敗

一度就労するものの職場に定着できず、転職を繰り返さざるを得なくなり、ひきこもり状態に至る例も少なくはない。このような就労体験におけるつまずきの背景として、近年の若者を取り巻く雇用情勢の極めて厳しい状況が考えられる。1980年代から続く新自由主義の流れの世界的な進行のなかで、日本においては1995年に日経連が発表した「新時代の「日本的経営」－挑戦すべき方向とその具体策」（日本経営者団体連盟,1995）を契機に、雇用の流動化、非正規化の流れが圧倒的な勢いで進行している。そうした中、とりわけ若者における正規雇用の機会喪失が顕著になっているのである。

QさんやRさんのように、短大を卒業して就職したのちにリストラにあった女性たちの場合、仕事を早期に退職したことが、次の就職に不利に働き、労働条件を切り下げながら職を転々とした挙句に、無業状態に陥っていた。

雇用する側は、大量に人材を採用するが、そのなかで扱いやすい人材だけを残して、他は大量

に解雇するということを繰り返している。このような「廃棄」という憂き目にあつた人々の履歴は傷つき、安定した就労への道が狭まり、同じように不安定な仕事に再就職するという悪循環が生じていく。この過程で人々の心は確実に蝕まれていくのである。

④ 一人親家庭のもつリスク

本研究の調査対象者のうち5名が両親のうちいずれかの死去、離婚や別居などの理由によって、一人親家庭で生育した経験を有していた。

LさんとEさんは父親の家庭で育ち経済的には困難がなかったが、父親は仕事で忙しく、実質的には近隣に住む祖父母によって育てられたのだという。しかし、中学生の頃からは祖父母との交流も希薄になっていき、学校で嫌な体験があつたことから不登校になっていったが、父親はそれに気がつかないでいた。

他の3名は母親のもとで育つが、収入が限られているため経済的に苦しい状態であつたという。Aさんの場合は母親が病気を患っていたこともあり、母親を介助する役割を担っていた。Mさんの場合は仕事をしている母親に代わって家事などを担っており、学校よりも家庭における存在意義が大きかつたといえるであろう。

(2) 透明な排除プロセス

前節では、「いじめられ体験」「不登校経験」「就労や就職活動での失敗」「一人親家庭」といった顕在的な要因が直接的に及ぼす影響について述べてきたが、対象者たちの歩んだ道を詳細に見ていくと、これらの要因が別の作用の仕方をしている側面が浮かび上がってくる。それは一見すると先に説明した「顕在的な要因」に比べると直接的な影響は少ないように思われるかもしれないが、もっと深層的な部分で対象者らの人生に影響を及ぼしていると思われる。

① 自らの選択の結果として排除されていく

一つ目は、表面上は学歴を積み重ねていこうとするが、十分な教育的ケアを受けることができず徐々に自分の存在基盤が希薄化していき、やがて身動きが取れなくなってひきこもり状態に至るというプロセスである。

本研究の対象者においては、大学や専門学校にまで進学したものの、就職活動をする頃になって不安のために立ちすくみ、一步を踏み出せないまま卒業し、行き場を失って徐々にひきこもっていくという例が多かつた。そのような対象者のなかには、過去にいじめられ体験や不登校経験のある者もいたが、まったくそのような経験がない者もいた。

OさんやPさんの場合、学校生活では表面上は適応しており、教員から注意を受けることもなかつた。しかし、それは必要な注目を向けられることもないということであり、また友人との交流もほとんどなかつたという。彼らのように、徐々に孤立していく若者たちにおいても、この排

除が緩慢に進行していることが見て取れる。彼らはいじめられ体験を持たないし、進路においても受身的ではあったものの挫折体験はなかった。彼ら自身も目立つことを好まず、周囲の陰に隠れるように過ごして生きたのであるが、その結果として存在感が希薄になってしまっていた。結局、大学を卒業する頃になって自分のなかに何の経験も蓄積されていなかったことに気づき、就職活動に踏み切れずに立ちすくんでしまったのである。

同じようなことは不登校を体験したものの高校では回復し大学や短大まで進学したHさん、Iさん、Jさんにもあてはまる。三人とも、高校や大学・短大では友人ができずに孤立しており、就職活動でのつまずきからひきこもり状態に陥った。

また、不登校状態に陥った後、中学を卒業してサポート校や単位制高校に進学し対象者の何人かにおいても、似たようなプロセスが見出された。LさんやMさんの場合、中学校の時に周囲にとけ込めずに孤立し、不登校状態に陥った。孤立した状態に陥った直接的なきっかけとしては「しばらく学校を休んでいたら遊ぶ相手がいなくなった」(Lさん)、「いつも一緒にいた友人が引越したら話をする相手がいなくなった」(Mさん)など何らかの理由で対人関係が途切れてしまったことが語られ、その後新たな関係を作ることができずに孤立してしまったのだと語られた。不登校に陥った当初は担任教員による家庭訪問などもあったが、学年が上がり担任が変わったことなどにより担任との関わりもほとんどなくなっていった。彼らにとってこのような体験は、周囲から関心を向けられない「どうでもいい」(Lさん)、「いなくてもいい」(Mさん)ような存在としてあつかわれる体験であり、そのような劣等なものとしてしか自己の存在価値を感じられなくなってしまうという。

DさんやEさんの様に、「不登校」や「いじめられ体験」から「ひきこもり」へ移行していった例も、同じような文脈で理解することができる。Dさんは中学校で不登校状態になり、その後単位制高校を卒業するまでの間ほとんど人と顔を合わせることはなかったという。

このように、実質的に対人関係から孤立している状態であったり、ひきこもっている状態であっても、表面上はそれが一つの就学スタイルとして是認されることによって、彼らが自己をはぐくんでいく上で必要な刺激を享受する機会がなくなっている。特に、中学校で不登校を経験した後に単位制高校やサポート校に進学した場合、実質的にはひきこもっている場合も多く、結果的に教育的「ネグレクト(放置)」に近い状態に陥っていくという逆説がある。高山(2008)によると、1990年に文部省(当時)が示した、不登校はその子自身の問題に起因するものではなく「どの子にも起こりうるもの」(文部省学校不適応対策研究者会議, 1991)という認識の転換は、不登校に対する許容的な空気を生み出したが、結局問題を上級の学校へと先送りすることにつながり、後の「ひきこもり」という問題を準備することとなった。認識の転換によって、学校による子どもたちへの統制管理(登校刺激)は弱まったかもしれないが、実際には登校していないが形だけ卒業、形だけ進学・在籍するということが日常化していった。このような対応は、学籍上は学校教育に包摂されているように見えながら、実質的にはそうではないという矛盾をはらんでい

る。つまり一方で「どの子にも起こりうるもの」という認識のもとに存在が認められながらも、実際には「存在しないほうがよいもの」として社会から排除された空間をさまよわなければならない構造があるのである。

② 見えない力によって孤立されてしまう

もう一つは、見えない力によって孤立させられていき、やがて自身を存在価値のないものとして認識していき、自ら社会への参加から退いていくようになるプロセスである。

あからさまないじめの場合、物理的な暴力行為や、「きもい」などと人格を根こそぎ否定するような言葉の暴力など、人を人として扱わない態度が取られる。この時に被害者の自尊心が著しく傷つけられ、自身を存在価値のないものとして認識していくようになることは容易に予想される。

しかし、森田(2010)によると「現代型」のいじめの特徴はあからさまな攻撃ではなく、もっと巧妙な手口になってきているという。森田は「現代型」のいじめの特徴として、(1) 日常生活の仕組みのなかから生成されること、(2) 逸脱性の境界が不鮮明なグレイゾーンで発生する現象であること、(3) 加害性の認識が低く、罪障感も希薄であること、(4) 現代社会を背景として発生していること、(5) 特定の子どもだけでなく誰もが被害者にも加害者にもなる可能性があることを挙げている。つまり、近年のいじめの場合、あからさまな排除という形態はとらない。時にそれは、クラスの規律の維持という正統的な根拠に基づいて行使されたり、あるいは気がついたら仲間に入れてもらえていなかったなどというように、それが「いじめ」であるのかどうかははっきりとしない形態をとることも多いからである。この場合、誰がいじめの主謀者であるかはっきりせず、また必ずしも行動が妨害される訳ではないので、明確にそれが「いじめ」といえるのか被害者にも自身判断できないこともある。仲間に入れないのは自己責任とされるが、標的とされた者の発言が周囲に聞き入れられることはなく、また彼らに話しかけてくるものもない。被害者は存在を脅かされるというよりも、無視され、放置され続ける。いわば目に見えない力で排除されていき、やがて存在価値をはく奪されていくのである。

また、いじめや無視される目にあつたという体験に加え、周りの人が理解してくれなかったということが傷を深めたと語られることも多い。ある女性は、中学校の時に教室で無視や意地悪をされたが、それ以上にショックだったのが小学校からの幼馴染が誰も守ってくれなかったことであつたという。また別の男性は、中学の部活で他の部員から口を聞いてもらえないなど仲間はずれにされ、担任にそのことを訴えたが相手にされず、返って孤立状況が深まってしまったという。これらの場合は直接的な誹謗や中傷より、そのような状況にあることを黙殺されたことが彼らの存在を決定的に傷つけたといえるであろう。

いずれの場合にしても、これらの体験に共通した特徴は、表面的には排除されているようには見えないが、存在を承認されることはなく、最終的に孤立させられていくのである。

5. まとめ

本研究では、「ひきこもり」を多様な要因が時間とともに絡み合いながら進行するプロセスであると考え、このプロセスについて具体的に把握するために、若者自立支援施設を利用している「ひきこもり」経験者を対象にした面接調査の結果について検討した。

その結果、これまで指摘されてきたように、ひきこもりに影響する要因として「いじめられ体験」「不登校」が大きいことが明らかとなった。また、就労したのちにひきこもりに至る要因としては「就労の失敗」が強く影響していると考えられた。その他に、本研究の対象者においては「一人親家庭」の抱えるリスクについても知見が得られた。

しかし、これらの要因がいわば顕在的であり、比較的直接的にキャリアの形成を阻害していくのに対して、表面上はキャリアの形成に影響がないように見えたり、あるいは「不登校体験」によって傷ついたキャリアを修復するような選択に見えながら、長い時間をかけてひきこもり状態へと至らしめるような「透明な排除」のプロセスの存在が浮かび上がってきた。

一つ目は、表面上は学歴を積み重ねていこうとするが、十分な教育的ケアを受けることができず徐々に自分の存在基盤が希薄化していき、やがて身動きが取れなくなってひきこもり状態に至るというプロセスである。もう一つは、見えない力によって孤立させられていき、やがて自身を存在価値のないものとして認識していき、自ら社会への参加から退いていくようになるプロセスである。

このような「透明な排除」について考えるとき、岡本（2005）の「管理社会」についての考察が参考になる。岡本によると、ポストモダン社会（つまり現代）は「自由管理社会」であり、旧来の「統制管理社会」とは一線を画すのだという。この「自由管理社会」の特徴は、個々人の自由を尊重しつつ生命や行動を管理するような社会である。本研究では、当事者自身はキャリアを形成するために選択しているのであるが、それが結果的に排除につながっていくという構造が見だされた。このような排除の構造は、「自由管理社会」における、マイルドな管理のあり方とかわかっていると思われるが、詳しくは別稿にて検討していきたい。

付記 本研究は平成24年度、札幌学院大学研究促進奨励金（SGU-S12-211002-07）の成果である。

引用文献

- Herman, J.L. (1992) *Trauma and Recovery*, Basic Books. (中井久夫訳(1996)『トラウマと回復』みすず書房.)
- 近藤直司・岩崎弘子・小林真理子・宮沢久江(2007)「青年期ひきこもりケースの精神医学的背景について」『精神神経学雑誌』109, 834-843.
- 厚生労働省(2003)『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン～精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか』.
- 厚生労働省(2010)『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』.

- 文部省学校不適応対策研究協力者会議(1991)『登校拒否問題について(中間まとめ)』.
- 内閣府(2010)『若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)』.
- 日本経営者団体連盟(1995)「新時代の「日本的経営」:挑戦すべき方向とその具体策」.
- 森田洋二(2010)『いじめとは何か』 中公新書.
- 武藤清栄(2001)「ひきこもりの概念の変遷とその心理」『現代のエスプリ』403, 35-44, 至文堂.
- 村澤和多里(2012)「再帰的プロセスとしての「ひきこもり」」『心理科学』33, 61-74.
- 岡本裕一郎(2005)『ポストモダンの思想的根拠—9・11と管理社会』 ナカニシヤ出版.
- 斎藤環(1998)『社会的ひきこもり 終わらない思春期』 P H P 研究所.
- 社会経済生産性本部(2007)「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書」.
- 高山龍太郎(2008)「不登校から『ひきこもり』へ 荻野達史他『「ひきこもり」への社会学的アプローチ—メディア・当事者・支援活動—』 ミネルヴァ書房.
- 東京都(2003)『実態調査からみるひきこもる若者のこころ』 平成19年度若年者自立支援調査研究報告書.

The Invisible Exclusion Process of 'Hikikomori'

MURASAWA, Watari

ABSTRACT

More recently, the Japanese Ministry of Health, Labour and Welfare have suggested six specific criteria required to valuation Hikikomori. While the degree of the phenomenon varies on an individual basis, often the processes into Hikikomori are very similar.

The purpose of this study is to clarify the processes into Hikikomori. Subjects were 18 Hikikomori persons who access to youth support center. As a result, a number of subjects experienced school refusal or bullying. Despite their attempts to reintegrate into society, they are excluded. Through discussion, two invisible processes of exclusion on their career were unveiled.

Key words: Hikikomori, bullying, school refusal, invisible exclusion

(むらさわ わたり 札幌学院大学人文学部准教授 臨床心理学科)